梔子柏皮湯『傷寒論』

方薬組成	山梔子６ｇ　黄柏６ｇ　甘草３ｇ

単味の薬理研究

❖山梔子⇨142頁　❖甘草⇨14頁

❖黄柏❖

本品は古称を蘗木（はくぼく）といい，ミカン科の植物キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. あるいは川黄柏（シナキハダ）*P. chinense* Schneid. var. glabriusculum Schneid. の樹皮である。

✣『神農本草経』の記載

「主五臓，腸胃中結熱，黄疸，腸痔，止泄痢，女子漏下赤白，陰陽蝕瘡」

・五臓，腸胃中結熱：臓腑の中の熱を指し，中医学ではその範囲は広範で，腸胃に炎症があるものは腸胃有熱に属すが，心熱は炎症によるものとは限らず，血熱症状があったり，心は神明を主るので神経系統の症状もみられる。このほか肝胆湿熱・膀胱湿熱・腎熱などいずれも五臓の結熱に属する。

・黄疸：炎症性黄疸を治療できる。

・腸痔：炎症性の腫脹・疼痛・出血の場合で，外痔核を指す可能性がある。

・止泄痢：赤痢による下痢を治する。

・女子漏下赤白：不正性器出血や赤色・白色の帯下を指す。

✣後世の医家の応用

『名医別録』：「肌膚が熱をもって赤く腫れ（丹毒の可能性がある），目が赤く，熱く痛む，口瘡に用いる」

張元素説：「膀胱の相火を瀉し，腎水の不足を補い，諸痿癱瘓を治療し，清熱利小便する」

李東垣説：「諸々の疼痛で耐えられないものを治療できる」

朱丹溪説：「知母を配合すると滋陰降火し，蒼朮を配合すると除湿清熱し，治痿の要薬となる。細辛を配合すると口舌のびらんを治す」

『本草綱目』：「小児の頭部のできものに塗る」

『現代実用中薬』：「打撲捻挫などに，粉末を泥状にしたものを塗って貼る」

黄柏は苦寒で，清熱燥湿・瀉火解毒の働きがある。張仲景は梔子柏皮湯で黄疸を治療しているが実は黄柏が主な働きをしている。まとめていうと，急性炎症や熱性出血の場合，黄柏は非常に有効で，その治療効果は黄連に匹敵する。黄柏と知母の配合を丹溪は滋陰降火に用いたが，われわれは下焦の湿熱を清するのに用いる。当帰・仙茅・仙霊脾を配合したものは二仙湯で，更年期障害に用いることができる。黄柏はまた婦人の帯下が黄色で臭い場合や，癰腫瘡毒・瘡瘍などにいずれも顕著な治療効果がある。

✣黄柏の現代薬理作用

①抗菌作用：黄柏の煎剤やアルコール抽出液は，試験管内で黄色ブドウ球菌・白色ブドウ球菌・表皮ブドウ球菌・腐性ブドウ球菌・溶血性連鎖球菌・肺炎双球菌・炭疽菌・コレラ菌・ジフテリア菌・枯草菌・大腸菌・緑膿菌・チフス菌・パラチフス菌・脳膜炎双球菌・アルカリ糞便菌に対し種々の程度の抑制作用を有し，多くの実験結果から各種の赤痢菌に対し比較的強い抑制作用を有することが証明されている。黄柏の抗菌作用の原理は，細菌の呼吸とRNA合成を強力に抑制することと関係がある。このほか，黄柏の煎剤はレプトスピラに対し比較的強い殺滅作用を有する。黄柏の煎剤，水抽出液は，多種の皮膚真菌，例えば紫色毛癬菌・綿状エピテルモフィトン・鼠径部表皮癬菌などに対し，種々の程度の抑制作用を有する。膣トリコモナスに対しても一定の抑制作用がある。

②降圧作用：黄柏を麻酔した動物の静脈や腹腔内に注射すると，いずれも明確で持続的な降圧作用を生じる。

③平滑筋に対する作用：黄柏はウサギの切除した腸管の収縮を増強する

働きがあり，収縮の幅を増加させる。中に含まれるベルベリンは，収縮の幅を増加させ，オバクノンは張力と振幅を増強するが，黄柏内エステルは，腸管を弛緩させる。

④**血糖降下作用**：黄柏と黄柏内エステルは血糖を下げる働きがある。

⑤**その他の作用**：黄柏には血小板の保護作用があり，あわせて微弱なクラーレ様作用がある。

適応証

- 傷寒で黄疸と発熱がある場合。
- 発熱・心煩・吐血・鼻出血，目が赤く，痛む場合。あるいは黄疸・小便不利・脈数の場合。

方解

本方は山梔子の苦寒瀉火により，湿熱を二便から出し，黄柏の清熱利湿の働きで，山梔子を補助し黄疸を消す。二者は本方の主薬で，輔薬の甘草は，山梔子・黄柏の苦寒の性を緩和するだけでなく，清熱解毒の作用も有する。

応用

陽黄・発熱があり，腹部の脹満はなく，大便は順調である場合の病証に用いる。本方は大黄を用いておらず，その主る証候は茵蔯蒿湯より軽い。

症例50

患者：康〇〇，男性，32歳。

現症：１週間前に，突然中脘部が脹満し，不快で38.5℃の発熱があった。工場の医務室で治療を受け，西洋薬を服用したが無効で，４日後に熱は下がったが，眼瞼結膜と皮膚に黄疸が出現した。某医院で検査を受けたらGPTが300，黄疸指数が80，西洋医の診断は黄疸型肝炎で，現在入院治療を受けている。食欲不振・悪心があり，小便は濃い茶色，大便は３日なく，舌紅・苔黄・脈弦数である。証は重症黄疸を伴った湿熱に属する。

処方：梔子柏皮湯および茵蔯蒿湯加減を用いる。
生大黄18ｇ，山梔子15ｇ，黄柏９ｇ，川黄連６ｇ，茵蔯蒿30ｇ，田基黄15ｇ，木通９ｇ，鮮茅根30ｇ，７剤。

経過：１剤服薬後，大便は通じ，小便もまた通利した。原方を加減して１週間治療した後，全身の黄疸はかなり減少し，胸悶煩悪は改善し，GPTは70になり，黄疸指数も40に下降した。大黄を減じ，健脾利湿の薬物を加えて７剤続服後，黄疸は完全に退き，黄疸指数も10になり，GPTは30になって飲食も増加し，入院３週間後に退院した。

考察：本例は急性黄疸型肝炎で湿熱俱重型に属しており，大黄・黄連・黄柏・山梔子を多く用いて清熱解毒し，また田基黄は肝炎治療に常用される主薬で，清熱解毒利湿作用を有する。以上５味の薬物で肝炎の本を治療し，利胆の薬物として大黄・山梔子・茵蔯など，利水の薬物として茵蔯・木通・鮮茅根を用い，大黄で通便して，黄疸を二便から出すことができた。

症例51

患者：蒋〇〇，女性，41歳。

現症：患者は右頰の皮膚が潮紅し，皮膚の色は紅赤で，雲に似た形の腫脹・火照り・顎下リンパ節の腫脹がある。初発時は半年毎に１回発作があったが，最近の半年間は毎月発作がある。来診時は発病３日目で体温は38.5℃，証は丹毒に属し，治療は清熱解毒・解表去風がよい。

処方：梔子柏皮湯加減を用いる。
山梔子９ｇ，黄柏９ｇ，荊芥９ｇ，防風９ｇ，薄荷９ｇ（後下），牛蒡子９ｇ，玄参９ｇ，５剤。

経過：服薬後紅腫は徐々に退き，腫脹は完全に消えた。

考察：本例は丹毒で，中医は湿熱が火毒に化したと認識しており，山梔子・柏皮で瀉火解毒し，荊芥・防風・牛蒡子・薄荷など解表去風の薬物を加え，邪を皮毛から追い出した。本方は丹毒治療の有効な経験方で，多くの丹毒の例が治癒した。